



写真-1

硬式テニスボール加圧保管装置 1号器 (平成3年頃作製)

硬式テニスボールは、軟式テニスボールのように空気注入用のへそが無いので、プレッシャーボールであれば缶から開封した途端に徐々にボール内の空気が外部ににじみ出て、約2~3週間程度でボールの硬さが徐々に柔らかく変化するのが解るようになり、1ヶ月もすると打球音も低く鈍くあまり気持ちよく飛ばなくなり、ニューボールではバックアウトの打球でもへたっていると低圧的に相手コートに入るため、本当の試合に向けての練習には不向きである。全国的に殆どのクラブでプレッシャーボールで有れば、空気の少ない状態のボールでも我慢して使用したり、ノンプレッシャーボールで有れば鈍く重いボール潰れ感覚を我慢して硬い音でカンカン打ってレッスンしているように思う。そもそもノンプレッシャーボールで無い限り、市販されているプレッシャーボールは、大気圧プラス約1気圧の圧力が内蔵されており、それを缶やプラスチック容器に入れて同圧力で加圧されているので、ボールの内圧と外圧が均衡した状態となっていて空気の分子がゴムの分子より小さいが、ボール内部から空気が外部に抜けることは無く、半永久的に規格状態で保存されて販売されているのである。(だから缶から開けるとプシューと音がして空気が外部に飛び出るので有る。決して缶詰のように真空になっているのでは無い。あまり古いと開封してなくても少し柔らかいボールの時が有るが。)その原理を利用して約20年前に大容量のボール加圧保管装置を考案したのが写真-1であります。約30年前には、テニスグッズのカタログにポンプ付きの携帯用ボール保管容器(約4個入り)が数千円で販売していたのを思い出しますが、これは1組の容器でボール約65個を加圧保管できる代物です。面白いのは、結構空気が抜けてしまったボールでも、加圧力を小さくして保管し、徐々に圧力を上げていくと、時間はかかるが元の元気なボールになるので有る。人間と同じで弱っている人や初心者に行き成りプレッシャーを与えても潰れてしまうが、少しづつプレッシャー(ハードル)を上げて行くと、誰でも少しづつ成長して遂には大きく行くと有る。欠点は、保管容器自体(ステンレス製)が市販品で高価で、またその容器の口が小さいのでボールを出す時が結構面倒なことであります。しかし、日本のコートサーフェスは約10年前から急激に砂入り人工芝が多くなり、ボールの外皮(フェルト)の消耗度がハードコートに比べ劇的に少なくなり、外見では綺麗なボールでも空気が抜けているだけで捨てられているのが現状であります。これを進化させて市販品が出来ればエコロジー的に素晴らしいと思います。



写真-2

硬式テニスボール蘇生筒(棒リッチ)平成21年作製

昨年21年2月より脱サラしてフリーのテニスコーチを始め、約18年振りに硬式テニスボール蘇生装置として家庭用に低価格で考案したのが写真-2の棒リッチであります。ボール回収筒と同じ材料(塩ビ管: VU65×2000mm)を使用して下端部は密閉し、上端部のボール出し入れ口は、ねじ開封式の蓋にタイヤの空気口を設け、1筒で約30個が加圧保管できる個人用のボール蘇生装置であります。蓋の開閉やボールの出し入れも、専用道具を使えば女性でも簡単に操作出来、保管場所も取らず素晴らしいテニスグッズであります。材料費は1筒が約3,000円(コンプレッサー、圧力計、専用道具等の備品は含まず)で日曜大工が好きな方なら誰でも簡単に製作できるのが嬉しい。また筒の長さを短くすれば携帯用にもなるので便利である。一家に2筒(1軍用と2軍用のボールを分けて保管)有れば大変重宝します。

舞鶴設計所勤務(設計業務約25年間)時代から頭は柔らかいと褒めて戴いていたが、その柔らかさを発揮して、平成21年に硬式テニスボール加圧保管装置の2号器として少し発想を換えて試作したのが写真-3の業務用のボール蘇生器(ボールっち)であります。原理的にはボールを加圧して空気が少なくなったボールに空気を染み込ませて元気にさせる目的は1号器と同じであります。が、耐圧ステンレス容器や塩ビパイプの変わりに柔らかい透明耐圧ホースを使用しスパイラルに固定(アナコンダの様に)したため、ボールを出し入れし易く面白く、見た目にも美しく(オブジェ感覚で)大量のボール(写真: ホース10mで約140個)を保管(蘇生)することができます。ボールのへたり具合と加圧力(1~2kg/cm²)の加減によって保管圧力や保管期間が異なりますが、1ヶ月使用して空気が抜けたボールは、同じ位の蘇生器で寝かせておくと元の元気なボールに蘇生できるのが嬉しい。昨年約1年間この蘇生器にレッスンボールを出し入れして交代々に色々なボールを保管して耐圧ホースの耐圧、耐久、耐候性のテストをしておりますが、ボールの蘇生や保存は出来るがコストダウンや軽量化やホースの傾斜固定方法での機能性及び安全性において改善する余地が少しづつ見つかり、市販化にはまだまだ大きな山が有りそうです。しかし、クラブハウス等の片隅にこんな変わったボール加圧保管装置が置かれていて、それだけで話題になり面白いです。室内人工芝(オムコート)の有るクラブには必需品となるように検討して行き、今後もテニス技術(有本・健康・幸せテニス教室)と共に柔らかい発想をしてテニス生活を楽しんで行きたいです。



写真-3

硬式テニスボール蘇生器(ボールっち)平成21年作製

以上のようにボール1個にも暖かい愛情を注いであげると復活したり、試合中にここの一番の時にボールが恩返しをしてくれる時が有ると思う。他にも人工芝コートの片隅が剥がれていれば、下の砂を掃除機で一旦吸い取り、乾いていれば適切な接着剤で人工芝を地面に貼り付けて、吸い取った砂を再度上からまぶして補修したり、ネットも破れていればインシュロック等で補修して愛情を注いでいるのである。生徒さんや選手だけで無く色々な所に気持ちを吹き込んで行くのも私の大切なテニスの仕事だと思っております。(有本)